

米国の降伏

米国の武装情報収集艦「プエブロ」号事件

米国の降伏

米国の武装情報収集艦「プエブロ」号事件

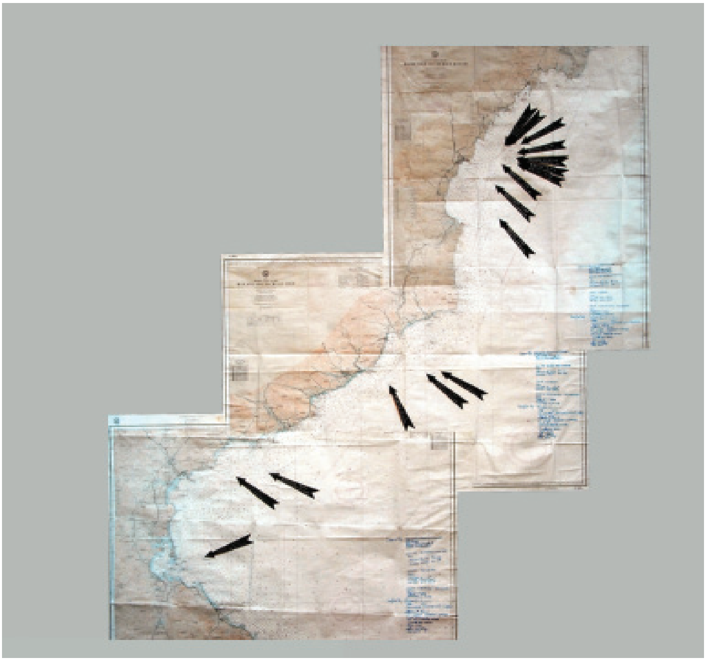
朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025年



祖国解放戦争勝利記念館の屋外鹵獲兵器展示場に
歴史の証拠品として繋ぎ止めてある米国の
武装情報収集艦「プエブロ」号



米国侵略船「シャーマン」号の撃沈碑のある大同江の
閑似亭浅瀬の所に繋ぎ止められていた
「プエブロ」号



「プエブロ」号の朝鮮民主主義人民共和国の
領海侵入図



「プエブロ」号の通信室



「プエブロ」号の偵察機材の一部



「プエブロ」号の乗組員



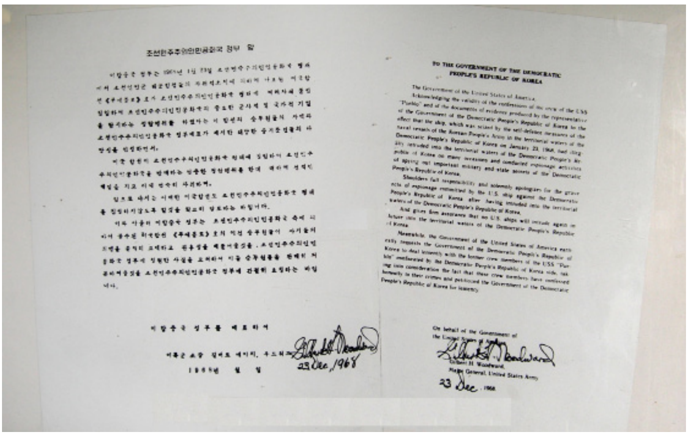
自白書を書いている艦長のロイド・
マーク・ブチャー(→)と
乗組員(↓)







謝罪文に署名する米国側首席代表のウッドワード（中央）



TO THE GOVERNMENT OF THE DEMOCRATIC PEOPLE'S REPUBLIC OF KOREA

The Government of the United States of America,

Acknowledging the validity of the confessions of the crew of the USS "Pueblo" and of the documents of evidence produced by the representative of the Government of the Democratic People's Republic of Korea to the effect that the ship, which was seized by the self-defense measures of the naval vessels of the Korean People's Army in the territorial waters of the Democratic People's Republic of Korea on January 23, 1968, had illegally intruded into the territorial waters of the Democratic People's Republic of Korea on many occasions and conducted espionage activities of spying out important military and state secrets of the Democratic People's Republic of Korea,

Shoulders full responsibility and solemnly apologizes for the grave acts of espionage committed by the U.S. ship against the Democratic People's Republic of Korea after having intruded into the territorial waters of the Democratic People's Republic of Korea,

And gives firm assurance that no U.S. ships will intrude again in future into the territorial waters of the Democratic People's Republic of Korea.

Meanwhile, the Government of the United States of America earnestly requests the Government of the Democratic People's Republic of Korea to deal leniently with the former crew members of the USS "Pueblo" confiscated by the Democratic People's Republic of Korea side, taking into consideration the fact that these crew members have confessed honestly to their crimes and petitioned the Government of the Democratic People's Republic of Korea for leniency.

On behalf of the Government of
the United States of America

Gilbert H. Woodward,
Major General, United States Army

23 Dec. 1968

米政府が二度と偵察行為を働かないということを
保証した謝罪文



「プエブロ」号を拿捕した朝鮮人民軍海兵(当時)

目　次

まえがき

今から57年前、全世界の注目を集めた「プエブロ」号事件が起きた。

1968年1月23日、米国の武装情報収集艦「プエブロ」号が朝鮮人民軍海軍に拿捕され、この事件をめぐる朝米対決は世界に大きなセンセーションを起こした。

当時、「プエブロ」号は多くの国の領海に侵入してスパイ活動を続けたが、別状なしに領海から抜け出していた。

これを見て高慢になった「プエブロ」号の艦長をはじめ乗組員は、世界「最強」の米国には何も恐るべきものがなく、いかなる国も自分らには手出しができないと確信していた。

しかし、彼らの確信は朝鮮領海で崩れてしまった。

朝鮮の領海に侵入してスパイ行為を働いていた「プエブロ」号が朝鮮人民軍海軍に拿捕されたのである。

世界のどの国の海域にも意のままに出入りしていた「プエブロ」号の拿捕ニュースはあっという間に世界の耳目を集めた。

米国の艦船が他国に拿捕されたのは、米国という国が出現して以来初めてのことであった。

本書は「プエブロ」号の拿捕から始まった朝米対決の真相をありのまま紹介している。

拿　捕

1968年1月21日、朝鮮民主主義人民共和国創建20周年を迎える新年の元旦からメンタイ漁が盛んに行われていた朝鮮東海の金策市沖合いに怪しい船が現れたことを、通常の巡察中の朝鮮人民軍海軍の警備艦のレーダーが捕捉した。

当時、警備艦103号の砲長であったキム・チュンシムは次のように語っている。

「そのとき、全く見分けがつきませんでした。それは、その船の侵入経路が極めて怪しかったからです。21日に馬養島にあった船が、22日には元山沖合いに現れたのです。ところで、その船だけは国籍標識がなく、船上には黒いアンテナがあちこちに立っているだけでした」

この状況は直ちに上級参謀部に報告された。

報告を受けた偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席は、元山沖合いで国籍不明の不審な大型船舶を発見したそうだが、不純な目的の船に違いない、もし、それが米国の船舶なら、われわれの要求に応じないだろうし、また抵抗することもあるだろう、スピードのある魚雷艇と飛行隊を出動させて無条件拿捕せよ、と命じた。

1968年1月23日、朝鮮人民軍海軍は即刻拿捕戦に

進入した。

朝鮮人民軍海軍の魚雷艇と警備艦はその船に近寄りながら、国籍と侵入目的を明らかにすることを要求する信号を送った。ところが、その船は「水路測量作業中」と発信し、急いで逃げ出した。

海兵たちはすばやく追撃して行く先を遮って包囲し、2分内に国籍を示さなければ発砲すると警告した。すると、その船は先に大口径機関銃を乱射し、全速力で逃げ出した。

怒った海兵たちは迅速に追撃して包囲し、艦上自動砲と機関銃の射撃でその船を制圧した。

海兵たちの銃弾が正体不明の艦の指揮所に命中した。銃弾が艦長の椅子を貫通し、相次いで武器架やマスト、アンテナに命中した。

強力な火力によって制圧された船のデッキにはまったく人影がなく、エンジンも停止した。そのときになって、船からは星条旗が揚がり、その正体があらわになった。

星条旗を見た海兵たちは、「朝鮮人民の不倶戴天の敵アメリカ帝国主義侵略者を掃滅しよう!」と叫び、100余年前に朝鮮に侵入した「シャーマン」号のように海の藻屑にさせようと意気込んだ。

しかし、そうするわけにはいかなかった。われわれの攻撃手段で船を沈没させるのは問題ないことだったが、「プエブロ」号を拿捕せよという命令

を受けたのだから、迅速に船に上がって敵を捕虜にし、船を引っ張って帰還しなければならなかった。
敵がどう対応するか分からない状況下で、捜索班を乗船させて敵を制圧するのは困難で危険な戦闘であった。しかし、恒常的にアメリカ帝国主義に対する敵愾心と復讐心に燃えている海兵たちはわれ先に捜索班に参加することを志願した。
そうして、7人の決死隊が組まれ、彼らには第一に、「プエブロ」号に上がって敵を残らず逮捕し、第二に、敵の武器を奪い、船を完全に武装解除し、第三に、敵の無線通信を遮断し、第四に、「プエブロ」号を元山港へ引っ張って来るという任務が下達された。
決死隊は「プエブロ」号の比較的舷高の低い船尾から船に上がった。
二つの組に分けられた決死隊は、一つの組は指揮所と船首区間を、他の組は機関室と船尾区間を捜索した。
最初の行動で星条旗を下ろし、4人が指揮所に足を踏み入れた。
彼らが指揮所に入ったとき、床に一人の乗組員がひれ伏していた。彼の襟元をつかんで起こし、親指を立てて一番高い上司がどこにいるのかと問い詰めると、知らないとかぶりを振った。それで彼の首に自動小銃を突きつけると、彼は親指で自分を指すのであった。
彼が艦長だったのである。

海兵たちは艦長と言葉が通じないので、海図テーブルの上の紙切れに絵を描いた。
数人の頭を描いた横に「＋…＝？」と書いてある絵をのぞき込んだ艦長は「83」という数字を書いた。
それを確かめるためにその数字に円を描き、これが間違えば首を切るという真似をすると、艦長はてきぱきと鉛筆を手にして人の頭に将校帽を描き、「6」という数字を書いた。
こうして決死隊は最初から敵の人数を正確に把握した上で戦闘を行った。襲撃組長のパク・インホ政治副艦長が指揮所のマイクを「プエブロ」号の艦長の手に渡し、手まねで乗組員全員が手を上げてデッキに整列するように指示しろと命じた。
艦長がぶるぶる震えながら、マイクに口を当てて何か話すと、船首のデッキに敵が手を上げて出てきた。
決死隊員たちは、船室から出てくる敵兵の手を縛り目隠しをした。次々と出る敵兵の数が多いので手も時間も足りなかった。それで敵兵をデッキに整列させ、前の敵兵にシーツを裂いて分け与え、敵兵同士で目隠しをさせた。そして、銃剣で刺すふりをして確認したが、目隠しがしっかりしてある敵兵は銃剣が近付いても反応がなかったが、そうでない敵兵は銃剣を突きつける前にびくっと驚いたりした。その場合にはやり直させて、兵士用の船室に閉じ込めた。そして、2人の海兵が80余人の敵兵を監視した。

決死隊員たちは艦長に全速力で元山に向かって機動するよう機関室に指示しろと命じた。艦長はエンジンを始動すれば爆破すると言った。それで、まず機関室を掌握してから船を機動させるべきだと考え、艦長と共に武器架を調べ、機関室へ下りていった。そこにいる敵兵にエンジンの状態を聞くと、始動できると答えた。2つのエンジンを回して見たところ、正常であった。指揮所で艦長がエンジンを始動すれば船が爆破すると言ったのは、時間を稼ぐための小細工だった。

狡猾な艦長を責め立てる時間の余裕もなかった。決死隊員たちは艦長に通信室の位置を聞き出し、彼を先立たせて情報総合室に上がった。

情報総合室を占拠し、米国の武装情報収集艦「プエブロ」号を拿捕したことを上級参謀部に報告した後、すぐ指揮所に上がって切換器を全速の位置に置き、元山へ向かった。

こうして、朝鮮人民軍海軍は14分という短い時間に船を完全に掌握した。

「プエブロ」号の拿捕戦闘を14分に終えたという報告を受けた金日成主席は、一つの分隊の人員で100人近い敵兵を制圧し、船を拿捕したのは大きな勝利である、みな英雄である、われわれが掲げた「一当百」のスローガンが正しかったことを海兵が実戦をもって示した、とすこぶる満足した。

米国の武装情報収集艦

船長53.8メートル、船幅9.8メートル、排水量約1000トンの「プエブロ」号は、各種の武器と7つのアンテナ、2つの大型受信機、情報収集設備を備えていた。

敵は、このような各種の偵察機材を利用して朝鮮の重要軍事基地はもちろん、国家の機密資料を具体的に探知していた。

武器架には2挺の機関銃、10余挺のカービン銃、数十挺の拳銃と数万発の銃弾や手榴弾が保管されていた。当時、人民軍の海兵が発射した3発の機銃弾が武器架を貫通し、武器を取るために近づいていた敵兵4人のうち1人は即死し、3人は重傷を負った。これを見た敵はそれ以上抵抗しようとせず、みな隠れてしまったのである。

これだけを見ても、「プエブロ」号は徹底的に偵察を目的とした武装情報収集艦であることがよく分かる。

このスパイ船で情報総合室は心臓部と言える。

そのとき、情報総合室と暗号変換室では米中央情報局(CIA)で専門訓練を受けた24人が昼夜交替で朝鮮の党と国家、軍事機密を探知・盗聴していた。

デッキには7つの大出力高性能アンテナが取り付けられており、それを通じて電波暗号を受信すれば、データを情報総合室の自動デコーダーを通して暗号変換室に渡すようになっていた。暗号変換室では受信した電波暗号を解読して緊要な軍事機密は米本土に直接送信し、その他のデータは情報総合室で録音して編成し、いったん情報収集活動が終わると、本国に戻って当該の情報機関に手渡すことになっていた。

決死隊員たちが情報総合室に入ると、床にバケツを並べて情報資料を焼却し、拳銃と斧で機材を破壊していた敵が非常口を通して逃げてしまった。

決死隊員たちが暗号変換室に到ると、内から錠が掛かっていた。彼らは艦長に戸を開けるよう命じた。艦長が戸を叩きながら叫ぶと、中にいた敵の一人が覗き窓を通じて艦長しかいないことを確かめてから戸を開けた。

そこには、米国で50年間はその秘密を保持すべき秘密暗号機材があったが、すでに中にいた敵がその機材を破壊して海に投げ込んでいた。

このように、敵は海に機材を投げ込み、破壊し、焼却しながら最後まであがいたが、決死隊員たちの迅速な戦闘行動によって多くの物的証拠を残した。

艦長室には指揮に必要な手段と羅針器、電話機、

艦長専用の狙撃兵器もあった。

将校船室にはスパイ活動で最も重要な役割を果たしていた作戦将校のフレデリック・カル・シューマーカー中尉と行政将校のエドワード・レンズ・マーフィー大尉がいた。

士官船室には6人の士官が、兵士船室には70余人の兵士がいた。

乗組員は民間人を装い、ベッドの下に軍服を隠しておいた。

「プエブロ」号が武装情報収集艦であることは、この船の来歴を通じてもよく分かる。

この船は1944年に建造された後、マークを受けた。

「プエブロ」という船名は、米国のある地方都市の村落名にちなんだものだが、スペイン語で「人民」という意味である。

船首の「GER」という英文字は「海洋研究船」という意味である。

1960年代に入って、大洋を航行するスパイ船が必要になった米国は、20年間も内外に輸送船として知られていた「プエブロ」号など3隻の船の内部を改造し、最新型の偵察及び通信機材と武器で装備された「海洋研究船」1号、2号、3号をつくり出した。「プエブロ」号は「海洋研究船」第2号の名を持って太平洋一帯で、「海洋研究船」第1号と第3号の「バナー」号と「パームビーチ」号は大西洋とインド洋

一帯で互いに連係を保ちながら、スパイ行為を働くようにした。

米国は「プエブロ」号を米太平洋艦隊に所属させ、作戦任務は太平洋艦隊司令官から、スパイ任務は米中央情報局から直接受けるようにした。

当時、米国はこのような最新型の船は世界にまたとない、誰も手出しできないとうそぶき、太平洋一帯と東朝鮮湾沿海に投入してスパイ活動を露骨に強行するようにした。

「プエブロ」号を海洋研究船に、乗組員を民間人に見せかけた米国は、米太平洋艦隊司令官の指図の下に1968年1月11日、日本の佐世保港から出港させた。

「プエブロ」号は対馬海峡を通ってロシア極東地域の海上にまで航行し、再び朝鮮の領海である清津、漁大津、馬養島一帯に入り、夜間には公海上へ出る方法で活動した。

1月23日、敵は海上一面に霧が立ち込めているのを利用してスパイ行為をする途中、正常な巡察警備任務を遂行していた人民軍の警備艦に発見されたのである。

当時、逮捕された乗組員は次のように陳述した。

艦長の海軍中佐ロイド・マーク・ブチャー:

「『プエブロ』号は徹底的に米太平洋艦隊に所属されているスパイ船であり、乗組員はみな豊かな偵察経験を持っています。

今回の作戦の総責任者は駐日米海軍司令官フランク・A・ジョンソン少将です。

われわれの任務は、朝鮮民主主義人民共和国海岸に配置された軍事対象とレーダー網の配置状況、朝鮮人民軍海軍の機動状態を確認することでした」

研究将校の海軍大尉スティフン・ロバート・ハリス:

「1968年1月11日、日本の佐世保港を出港して東朝鮮湾沿海に入ったわれわれは民間海洋研究船を装い、すぐ作戦を開始しました」

作戦将校の海軍中尉フレデリック・カル・シュマーカー:

「作戦水域で行動する期間、われわれは135回にわたって各種の電波探知機を捕捉し、数十回にわたって軍艦と漁船の流動状態を撮影しました」

行政将校の海軍大尉エドワード・レンズ・マーフィー:

「それまでこれといった成果を収められなかったことに業を煮やした艦長は、1月23日、さらに元山近くに接近することを命令しました。われわれは元山近くの沖合いにまで接近して偵察活動を展開しました。当時、われわれの位置は元山沖合いの麗島から7.6カイリ離れた所でした。まさにそのとき、朝鮮人民軍海軍の艦船が現れてわれわれを拿捕しました」

このように「プエブロ」号の乗組員は一様に、自分たちが朝鮮民主主義人民共和国の領海を17回も侵犯してスパイ行為を働いた事実を認め、共和国政府に提出する共同謝罪文に署名した。

「プエブロ」号事件と朝米対決

1968年1月23日の午後10時、朝鮮中央放送を通じて重大報道が全世界に流された。

「わが国の海軍の艦艇が、共和国の領海に深く侵入して敵対行動を強行していたアメリカ帝国主義侵略軍の武装情報収集艦『プエブロ』号を拿捕」

一方、ホワイトハウスでは急遽、非常安保関係者会議が開かれた。

会議には国防長官マクナマラ、国務長官ディーン・ラスク、中央情報局長官リチャード・ヘルムズ、大統領国家安保担当補佐官ウォルト・ロストー、米海軍第7艦隊司令官ウィリアム・F・ブリングル、駐日米海軍司令官フランク・A・ジョンソンなどが参加して互いに責任をなすりつけながら論争を展開した。

しかし、熾烈な論争の中でも、彼らには一脈相通ずるものがあったが、それは、大きくない朝鮮をあなどる極度の傲慢さであった。

「強力な空軍を動員して朝鮮の港湾か飛行場を一つや二つ叩きつぶすのが最もな選択だ」「『プエブロ』号を返さない場合、朝鮮の国旗を上げて航行する公海上の全ての船舶を拿捕または沈没させなけれ

ばならない」といった発言が続々と出た。
金日成主席は事件直後の1月24日、アメリカ帝国主義者が元山を爆撃すると威嚇しているが、やがて板門店に自ら出てきて謝罪するだろう、とその結果を予測した。
主席は「プエブロ」号を元山市民に見物させるようにし、ついで捕虜を平壌へ護送するよう命令を下した。
咸興鉄道局の機関士である労働英雄キム・トクチャンは、列車の乗組員と共に「プエブロ」号の乗組員たちを元山から平壌まで無事に到着させるという任務を受けた。
去る祖国解放戦争の時期、洛東江まで軍用列車を運転していく過程で米軍機の機銃掃射に遭って機関助士を失い、自分の体にも11個の破片が刺さったキム・トクチャンとしては、機関車の車輪で轢き殺しても恨みが晴れない仇敵を平壌まで無事に運んでいくと思うと、胸の中でこみ上げる憤激を抑えることができなかった。
真夜中に平壌に到着した「プエブロ」号の乗組員を迎えたのは、平壌駅舎に据え付けられた大きなサーチライトの強烈な光であった。
それは、現行犯として拿捕された「プエブロ」号の乗組員たちのぶざまな格好をサーチライトを利用して闇の中でもありありと撮って世界に公開すべき

だという偉大な指導者金正日（キムジョンイル）国防委員長の指示による照明「歓迎」であった。

「プエブロ」号の拿捕ニュースは全世界を震撼させた。

「米国の軍艦が他国に拿捕されたのは前代未聞の驚くべき出来事である。果たして『超大国』と自称する米国はどう対応するのだろうか?」という疑問に満ちた世界の視線が朝鮮と米国に向けられた。

また、米国は蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

当時、米大統領であったジョンソンはいたく驚いたような表情でマイクの前に現れ、「『プエブロ』号とその乗組員を拿捕したのは国際法の違反である」と言い捨てた。

1月24日に開かれた軍事停戦委員会第261回会議に出席した米国側の首席委員は、自分らのスパイ行為を認めず、民間の水先案内船が公海上で拉致されたという途方もない嘘で国際世論を惑わそうとした。彼は恥知らずにも、朝鮮が米国政府に謝らなければならない、賠償すべきだといった狂言を吐いた末、「プエブロ」号の拿捕が国際法の違反だとし、この事件を国連安保理に提訴すると脅かした。

「プエブロ」号の侵入目的は、以前に探知した朝鮮の水域に対する10余回の偵察資料を再確認し、朝鮮の軍事力が強化される前に自国が起こした朝鮮戦争(1950. 6. 25〜1953. 7. 27.)を再び挑発するためであった。

実際、「プエブロ」号は1月16日から23日までの間、命令通り清津、金策、馬養島、元山の水域で偵察任務を完了していた。

当時、朝鮮中央放送委員会のアナウンサーのチョン・ヒョンギュは、「プエブロ」号の乗組員に次のような質問を突きつけた。

「米国政府は今まで『プエブロ』号が朝鮮民主主義人民共和国の領海を侵犯したことを否認しているが、あなたたちはどう考えているのか?」

「プエブロ」号の行政将校マーフィーが答えた。

「厳然たる事実と海図、記録、そしてわれわれの率直な自白とその他の物的証拠は、われわれの犯した大きな過ちと重大な犯罪を明白に示す、疑う余地がなく、否認することもできない証拠です。われわれの偵察行為を証明する物的証拠は数多くあります。

われわれが航行中に記載した海図と記録文書から得た情報資料を利用しながら、私は補佐官たちと共に直接17回の侵入地点を記録しておきました。

多数の証拠、海図、そして文書で、私自身と各乗組員は、艦船がスパイ行為を働いていたばかりでなく、朝鮮民主主義人民共和国の領海を侵入したことを確定的に証明しています」

金日成主席は、「プエブロ」号の艦長の自白と将校たちの自白書を新聞や放送を通じて公開して、アメリカ帝国主義がわれわれに対するスパイ活動を悪

辣に行った罪を一つ一つ明らかにし、内外に暴露するようにした。また、1月27日にわれわれの原則的な立場を闡明した朝鮮民主主義人民共和国政府声明をまず発表するようにした。

共和国政府声明が発表されると、世界の数多くの国が積極的な支持と連帯を示した。

一方、金日成主席が予見したとおり、米大統領ジョンソンの命令によって膨大な兵力が韓国と朝鮮東海に向けて波のように押し寄せてきた。

自分らの罪状が全世界に暴露されると、米国は原子力空母「エンタープライズ」号をはじめとする膨大な侵略兵力を急遽出動させて元山から12カイリ離れたところまで接近させ、拿捕された船と乗務員を釈放しなければ「報復」や全面戦争も辞さないと脅かし、力をもって朝鮮を屈服させようとした。

朝鮮には一触即発の緊迫した情勢がつくり出された。

周辺諸国も朝鮮が直面した重大な情勢を大きな不安と同情、憂慮の中で見守っていた。

金日成主席は、「プエブロ」号事件が国際的な政治情勢問題にまで拡大した実態に関し、金正日国防委員長と慎重に話し合った。

主席は国防委員長に、自分が最高司令官という立場で「プエブロ」号をどう処理すればよいか判断し決心してみるようにと言った。

国防委員長は、金日成同志、私は米国が降伏書を出す前には絶対に「プエブロ」号の乗組員を釈放しない決心です、そして「プエブロ」号はわれわれの戦利品ですから、彼らが降伏書を出すとしても返しません、わが人民軍が拿捕したアメリカ帝国主義者の武装情報収集艦を後日、博物館に展示し、次世代にこれはわれわれが米国人から鹵獲したスパイ船だと話すつもりです、と答えた。

当時、ある周辺国の指導部は、米国の侵略戦争の企図、国際政治情勢の変化に関して金日成主席に要請した電話対話で、戦術的に少し譲歩してでも軍事衝突は避けるのが得策ではないかと建議した。

これに対して主席は、米国が自分らの犯罪行為を謝罪し、二度とそのようなスパイ行為をしないと保証するならば乗組員だけは送還することができる、万一の場合、米国がついに「報復」を選択するならば、われわれは「プエブロ」号の乗組員を全部処刑し、祖国防衛の聖戦に立ち上がるだろうという断固たる立場を表明した。

このような厳しい日々が流れる中、大同江畔の玉流館では金日成主席の出席の下、朝鮮人民軍創建20周年を慶祝する盛大な宴会が催された。

敵の戦争騒ぎが極度に達した危険極まりないときだったが、金日成主席は満面に明るい笑みを浮かべ、朝鮮労働党の指導の下に平和的な建設時期から

今日にいたるまで人民軍が積み上げた20年間の誇らしい業績を総括し、次のように宣言した。

「われわれは戦争を望みませんが戦争を恐れもしません。わが人民と人民軍はアメリカ帝国主義者の『報復』には報復で、全面戦争には全面戦争で応えるでしょう。アメリカ帝国主義者がわれわれの警告にもかかわらず、情勢を激化させてあくまで戦争の道へ進むならば、今度こそ彼らはより大きな惨敗をこうむるであろうことを、十分に覚悟すべきでしょう」

演説を終えた主席は、戦闘勲功を立てた人民軍の軍人代表たちと祝杯をあげた。

主席は、海軍を代表して祝杯をあげることを提議した軍人が「プエブロ」号を拿捕するとき、真っ先に船に乗り込んで戦ったそうだが、年少の人がご苦労だった、素晴らしい、と言って、キム・ヒョンギ上等兵の杯に祝いの酒をついだ。

その日、キム・ヒョンギは最高司令官同志の健康を祈る制式の敬礼は上げたが、主席がついでくれた杯には手を出せずにいた。

このとき、兵士の傍らにいた金正日国防委員長が、金日成同志が立派に戦った君を人々の前に押し立てて自慢したがっているから、どうぞ受けなさいと、軽く彼の背を押した。

兵士は敵艦に突進して勇敢に戦って傲慢なヤン

キーの鼻柱をへし折った勇士だったが、この瞬間には娘のようにはにかみ、顔を赤らめた。

主席は、キム・ヒョンギの手をやさしく取り、海軍が海をよく守らなければならない、祖国の海を頼む、と重ね重ね強調した。

一方、英雄的な朝鮮人民軍創建記念日を迎えて、朝鮮では「プエブロ」号の乗組員にもご馳走を出した。

ご馳走を前にした艦長は、英雄的な朝鮮人民軍創建20周年記念日を心から祝うと言って、有名な朝鮮の特産である朝鮮人参酒を250ミリリットルも飲み、補給将校も朝鮮人参酒の味が世界一だと言って謝意を表した。

他の乗組員も、自分らのスパイ行為が極めて重大であるにもかかわらず、このように寛大な扱いをしてくれて感謝するとし、英雄的な朝鮮人民軍創建20周年を祝って乾杯した。

歴史的な2・8節慶祝宴が終わった後、金日成主席は朝鮮人民軍指揮メンバーに、米国人が「プエブロ」号を送還しなければ「報復」すると騒ぎ立てているが、秘密に付してきた地対艦ミサイルと地対空ミサイルを公開してわれわれの報復宣言が決して空言ではないということをはっきりと示すべきだと言った。

そして、ミサイルは自国だけにあるかのように高慢にふるまう米国人がびっくりするようミサイルをこれ見よがしに公開しようとし、われわれの打ち出

した経済建設と国防建設の並進路線がいかに正しいものであるかを今一度確信するようになったと、力をこめて強調した。
米大統領ジョンソンは予測できなかった朝鮮のミサイルの出現で守勢に立たされた。
広島と長崎でその破壊力を誇示した原子爆弾をもって朝鮮だけでなく、反米国家を脅かしてきた米国であった。ジョンソンはにわかに棒に打たれたような気分であった。
当時、米国では大統領選挙を控えて激しい選挙戦が繰り広げられていた。
ジョンソンは、この選挙でライバルを押さえ、大統領の再選を狙ってあらゆる謀略策動をめぐらしていた。
しかし、ベトナム戦争に支出した莫大な軍事費によってインフレと深刻な経済危機をもたらした上に、「プエブロ」号の拿捕事件によって内外で苦境に立たされていただけに、ジョンソンの人気は急激に落ちた。
その上、米軍捕虜が朝鮮政府に提出した共同謝罪文と、自国政府に過ちを謝罪するよう要求する公開書簡が発表されてジョンソンはなおさら窮地に追い込まれた。
「プエブロ」号の乗組員がわが共和国政府に送った共同謝罪文は次の通りである。
「私たちの運命を決するこの厳粛なとき、心から

訴える幾つかの事情があります。それは、私たちが犯したスパイ行為が自分の信念に従って意識的に行った行動ではなく、上官の命令を機械的に実行しただけだということを考慮に入れて寛大に許してくれるよう心から要請するものです。

また、朝鮮に反対する侵略行為に加担した犯罪者として、朝鮮領海を侵犯してスパイ行為を働いたことを全世界の前で再び公然と認め、人間として、父母のある子息として、自分と家族のために朝鮮民主主義人民共和国政府が慈悲を施してくれるよう心からお願いします。

そして、私たちが生き返る道を一度だけ開き、家族にもう一度希望を与えることができるよう、寛大に許して故郷に帰れるようにしてください」

共同謝罪文について、捕虜たちが自国政府と大統領に公開書簡を送ったが、それも朝鮮中央放送を通じて大きく報道された。

公開書簡

ワシントン.D.C. 1968年2月29日 ホワイトハウス

アメリカ合衆国大統領閣下

米国艦船「プエブロ」号の将校と乗組員、民間人

海洋研究員は、われわれに対する拿捕、そして朝鮮民主主義人民共和国での抑留に関わると思われる諸般の事実と問題を説明しつつ、われわれの送還のためのあなたの助けを要請するために共同でこの文章を書きます。

……

朝鮮民主主義人民共和国政府が、われわれの送還が実現する前にわれわれの作戦を命令したわが政府が当然の礼儀を見せるべきだと主張しているのは正しいことです。

具体的に言えば、「プエブロ」号拿捕事件の真相が世界に明らかになった状況下で、わが政府が朝鮮民主主義人民共和国の領海に侵入して敵対行為をしたことを率直に認め、このような行動に対して心から謝罪し、そのようなことが繰り返されないということを保証してこそ、われわれが送還されるだろうと思います。

……

大統領閣下

要するに、われわれの将来の幸福とわれわれの家族である数百人の米国人の福利はあなたにかかっています。

……

共和国政府の声明と「プエブロ」号の乗組員の自白

書、謝罪文が朝鮮中央放送を通じて連日報道された。

自国の政府に対する捕虜や国民の非難が高まって一層窮地に追い込まれたジョンソンは、公海上での拉致という宣伝戦略が失敗したから「プエブロ」号の乗組員が全員殺されたという虚偽攻勢に移行せよとの命令を下し、「朝鮮では、『プエブロ』号の乗組員を虐待し、殴り殺した。今、テレビで放映されるシーンは、彼らが死ぬ前に撮ったものだと宣伝すれば、全てのメディアが反共戦略に移るだろう」と、最後のあがきをした。

金正日国防委員長は、アメリカ帝国主義者は白を黒、黒を白と言う者だとし、「プエブロ」号の乗組員を撮影した記録映画を早く制作して会談場に送ると共に、「プエブロ」号の乗組員を撮った写真、捕虜たちの対話や生活に関する資料、自白した録音資料を加えて送るよう指示した。

一方、世界の70余カ国に駐在している朝鮮代表部では、記録映画をはじめとする証拠物件をもって事件の真相を明らかにするための対敵言論戦が盛んに繰り広げられた。

いろいろなルートを通じて画面資料を収録したテープや録音物が国境と国境を越えて瞬く間に全世界に広がった。

1968年7月、ブルガリアで開催された第9回世界青年学生祭典では、祭典に参加した各国の人々が「プ

エブロ」号の乗組員の自白書、捕虜生活を収録した録画テープの購入に余念がなかった。

世界の多くの国の新聞には「プエブロ」号事件の真実と虚偽を判別する反映記事が次々と掲載された。

「プエブロ」号の乗組員の家族や親戚は、わが子や夫の送還を早く実現してくれることを米政府に要求して抗議文を送り、米議会議員らも捕虜送還問題を早急に解決すべきだと抗議した。

「プエブロ」号の艦長は、笑顔で妻と撮った写真をやるせない思いで見入りながら、今の悲惨な自分の姿と対比してみた。

彼は家を発つ前に妻とニューヨーク港を散策し、「自由の女神」像の前で「神様、反共戦線で自由の闘士として戦って月桂冠をかぶって帰ってきます」と誓いを立てた。

しかし、彼は朝鮮に志願した自分を慨嘆し、米政府と大統領を呪う手紙を書いた。

他の将校や兵士もやはり、自国の政府を糾弾しながら自分の故郷と政府宛に手紙を書いた。

わが方が彼らに提供した便せんの一隅には、朝鮮人民の精神と気概を象徴するチョンリマが描かれていた。

「プエブロ」号の乗組員を通じて、米国の道徳的低劣さと利己的な生活様式もことごとく暴露された。

1968年10月初めのある日、わが方は、米大統領の

謝罪がなければ乗組員を全員軍事裁判にかけるという最後通告をした。すると乗組員は、われ先にわが方の関係者を訪ねてきて互いにそしり合う醜態をさらけ出した。

誰は米中央情報局から派遣されたスパイで、艦長を監視することになっている、また誰は、米陸軍情報部から派遣された要員で、自分を監視することになっている、また、ある者は私服を着ているが、将校を監視することになっている等々、二重三重の監視網が張られている烏合の衆の実態をそのまま告白した。

このように彼らは同じ船に乗っていても、てんでに櫓をこいでいた。

2016年、フランスの東方言語文化国立大学のある教授は、朝鮮の有名な作品で短編集を作る過程で、「プエブロ」号の乗組員の醜悪さと狡猾さを嘲笑するチョン・インガンの短編小説『平壌の吹雪』を翻訳・出版したが、それはフランスでベストセラーとなった。

短編小説『平壌の吹雪』は、「プエブロ」号の乗組員が金に目のくらんだ醜悪な雇用兵であることを赤裸々に暴いている。

その細部の一つが、捕虜たちの理髪師に関する内容である。

当時、わが方の理髪師が毎日のように米兵の髪を

刈ってやったが、2カ月も経たずにしてこれ以上理髪ができないといった。

それで、乗組員の中に理髪のできる者がいるのかと聞いたところ、小柄なフィリピン系の兵士が自分ができると買って出た。そうして彼にバリカンが渡された。実際、彼は理髪ができなかったが、そのときからほぼ1年間理髪をしながら何とか手に慣れるようになった。彼は理髪を終えては欠かさずサインをしてもらったが、それは後で金を受けるための領収証であった。彼は送還されるときまで同僚の理髪をしてやってほぼ2000ドルの金を稼いだ。

もう一つの例がある。当時、捕虜たちに毎月朝鮮産のタバコ『カルメギ（かもめ）』が30箱ずつ支給されたが、彼らはそのタバコも一本一本まで金で売り買いしていた。

彼らは80余名の集団だったが、それぞれは自分のためにだけ生きていたのである。

朝鮮に対する偵察犯罪行為を働いたスパイに寛容と優遇措置を取った事実を現地で目撃したフランスやポーランドなど世界各国の記者の間では大きな反響が起きた。

「私は、朝鮮人が捕虜を殴り殺したり銃殺したという宣伝を聞いた。ところが、このように捕虜に運動をさせ、便宜を図っている現実を直接目撃して、それがでっち上げられた米国の虚偽宣伝であるこ

とを知った。朝鮮人は、捕虜に対して高尚な人道的施策を実施している。このような人々を侵害した米国を憎むようになり、スパイ行為を働いたことについて糾弾する」

朝鮮は、乗組員たちに社会主義制度の優越性と帝国主義滅亡の不可避性を示す出版物や写真を見せ、見学と公演観覧もさせた。その過程で乗組員たちは自分らの低劣さと後進性を自認した。

「プエブロ」号の乗組員に対する審問を担当していたチェ・ソンイル(当時朝鮮人民軍将校)は次のように言った。

「10月中旬のある日、われわれが捕虜を連れて宿所へ帰ってくる途中のことでした。ある道路の側に「世界の至る所でアメリカ帝国主義の五体を引き裂こう！」という大型スローガンがありました。捕虜の中には、朝鮮語を知っているヘモンドという中佐がいましたが、スローガンに目を凝らしていた彼が同僚たちに何かとささやくと、彼らはたちまち顔が真っ青になり、ぶるぶる震えるのでした」

わが方の護送員は、米国の力が強く見えても、このように各国の人民が取り組んで五体を引き裂けばいくらでも撃滅することができる、これがまさにわが革命の戦略的方針であり、また革命を進める小さい国の人民の闘争戦略だ、これは偉大な金日成主席の報復の意志だ、と彼らに分かりやすく説明した。

そして、米政府の侵略性を悟ったなら、自分のためにでもわれわれの立場を支持すべきだと念を押した。
　乗組員たちは信川階級教育館も見学し、宿所会館に展示された反米・階級教育資料も見た。
　獣さえ顔を赤らめるようなアメリカ帝国主義者の殺人蛮行の真相を示す資料や写真を現地で目の当たりにした乗組員たちは、口をそろえて自国政府を呪い、自身をなじった。
　そして、感想文に次のように書いた。
　「われわれの先輩が朝鮮でこのように野蛮な虐殺行為を働いたとは知らなかった。私は二度と軍服を着ない。米兵になったことが恥ずかしい。農作を営んだり教師を勤めたりしながら子息や次世代に、朝鮮戦線へ行ってはいけないと話してやるつもりだ」
　1968年9月、朝鮮民主主義人民共和国創建20周年を慶祝する30万勤労者のパレードが金日成広場で盛大に行われた。
　共和国が歩んできた20年間の苦難と栄光に満ちた道程を誇り高く振り返る群衆の顔には、あらゆる風波を乗り越え、この地に最も優れた社会主義の楽園を建設した金日成主席への限りない敬慕と感謝の念がこもり、共和国の公民としての栄誉と自負が溢れていた。
　このパレードは、「プエブロ」号事件をめぐるア

メリカ帝国主義者のあらゆる戦争挑発策動と悪らつな制裁や封鎖の中でも屈しない朝鮮人民の姿と今後の勝利を確信する固い信念をはっきりと示した。

朝鮮民主主義人民共和国創建20周年慶祝大会行事に参加するために訪朝した世界各国の記者と社会各界、政界の人士は、「プエブロ」号の乗組員との内外記者会見にも参加した。

米国のニューヨーク新聞『ガーディアン』の記者ライオネル・マルティンは記者会見で次のように語った。

「将校と兵士の証言を聞いてみると、彼らが朝鮮の領海を侵犯したことが明白です。私はこの証拠が否定しがたいものだと思います。また、私は米政府、つまりわが政府が、これに対する責任を回避しているという彼らの見解に同意していることを明らかにしたいです。この会見に出席した唯一の米国記者として私が乗組員たちに言いたいことは、ニューヨークのわが新聞を通じて米国人民にあなたたちの考え、あなたたちの熱望を伝えるために私ができる限りのことをするということです」

司会者が記者会見の終了を告げようとしたとき、「プエブロ」号の艦長がいきなり椅子の上に立って興奮した声で叫んだ。

「自国の命令を実行する軍隊の軍人と海兵の行動について道徳的責任を負うべきわが政府がもしその

責任を受け入れなければ、われわれはここで裁判にかけられ、一部には死刑が、残りには長期懲役刑が言い渡されるものと確信しています。

私自身をはじめわれわれは皆、自分の家族を非常に恋しがっています。そして、実際は家族が私たちよりも大きな苦痛をなめているものと思っています。それは、われわれに別状はないだろうか、また決定が下されるまでどれぐらいの時日がかかるだろうか、と家で心配する人がまさに彼らであるからです。

これは疑う余地もなく私たち皆に耐えがたいことであり、それはこの問題を解決するための措置がいつ取られるのか、あるいは、全く取られないかも知れない状態で長い期間を待たなければならない不安に駆られているからです。

私はひたすら、われわれのことをはっきり、そして、同情心をもって報道してくださることをあなたたちに頼みます。

これは偽りのない率直な気持ちであり、私はこれをこの世の誰もが容易に納得できる感銘深い話につくろうとは思っていません。

われわれは何よりも、今まではいたくセンチメンタルに接してきたわれわれのことが、実際に幸福な結末になることを期待しています。ありがとうございました」

内外記者会見での艦長の告白のニュースと共に、共和国政府に送る捕虜の請願書と共同感謝文が毎日のように新聞や放送を通じて報道された。

当時、朝米間の会談が行われていた板門店ではこのようなこともあった。

わが方のパク・チュンクッ少将が、今後米大統領が朝鮮に謝罪すれば捕虜は釈放されることがあろうが、船は返せないという共和国政府の確固たる立場を伝えると、米国側の首席代表のウッドワードは茫然自失し、あたふたと休会を告げたそうである。

ジョンソンは、国内からも高まる反政府気運に押されて、鬱陵島水域に集結させた米軍兵力を密かに一つ、二つ撤収させた。

しかし、朝米対決は終わらなかった。

米国側首席代表のウッドワードは、自分の個人名義で謝罪文に署名すると言い出した。しかし、パク・チュンクッ少将は、そんな形式上の偽りの謝罪ではなく、大統領が保証する政府レベルの署名があってこそ公式謝罪として認めることができると強く要求し、それができなければ捕虜を軍事裁判にかけて将校は銃殺し、残りは20年、10年以上の懲役刑に処すると通告した。

軍事裁判の通告に電気に感電したかのようにぼんやりと突っ立っていたウッドワードはあわてて姿を消し、再び会談場に現れなかった。

金正日国防委員長は、「報復」と全面戦争を喧伝していた敵が、われわれの連続的な打撃に気がくじけ、最近は戦術的に閉じこもっているが、そんな敵を引っ張り出して叩くべきだと言った。

第22回、第23回、第27回朝米軍事会談で、われわれが捕虜をおとなしく釈放させるのではなく、共和国の境内から追い出す追放の形式を討議した際、米国側代表は恥ずべき場面が歴史に記録されるのを恐れて記者を参加させないようにと哀願した。

ついに1968年12月23日、「プエブロ」号が拿捕されてから11カ月ぶりのこの日、米国は朝鮮人民の前に膝を屈して正式に謝罪をした。

9時定刻、第29回朝米軍事会談で米国は、わが共和国政府に送る謝罪文に署名をした。

「朝鮮民主主義人民共和国政府宛

アメリカ合衆国政府は、米国艦船が朝鮮民主主義人民共和国の領海に侵入して朝鮮民主主義人民共和国に反対する重大な偵察行為を働いたことに対して全面的な責任を負い、これを厳粛に謝罪し、今後二度とどんな艦船も朝鮮民主主義人民共和国の領海を侵犯しないようにすることをしっかりと保証します。

併せて、アメリカ合衆国政府は、朝鮮民主主義人民共和国に没収された米軍艦船「プエブロ」号の元乗組員が自分らの罪業を率直に告白し、寛容を施し

てくれることを朝鮮民主主義人民共和国政府に請願したことを考慮に入れて、乗組員を寛大に処分してくれることを朝鮮民主主義人民共和国政府に切々と要請する次第です」

そのとき、米国側代表は度肝を抜かれて謝罪文に日付を記すことさえ忘れていたが、わが方の代表から叱責されてあたふたと書き入れた。

当時、米大統領ジョンソンは「米国の建国以来、歴史に残した謝罪文はこれ一つだけだ」と悲鳴を上げた。

1968年12月23日11時30分、板門店を通して米軍情報収集艦「プエブロ」号の乗組員全員を共和国の境外へ追放した。

「プエブロ」号の乗組員を釈放ではなく、追放の形式で受け入れたことで、米国は世界の面前で再び恥辱を受けた。

共和国の境外へ追放された艦長のロイド・マーク・ブチャーは、全ての乗組員を代表して朝鮮人民に最後の感謝のあいさつをした。

「……私たちは今後生存している間、この体験を決して忘れないでしょうし、朝鮮民主主義人民共和国に抑留されていた期間に得た教訓をわれわれの子孫にいつまでも伝えるでしょう。

私たちはあなたたちのすぐれた道徳的品性と貴国の法律の道徳的基礎を痛感しました」

わが方は、「プエブロ」号の拿捕当時、朝鮮人民軍海兵の命令に不服し、愚かにも無謀な反抗をして即死した一人の死体も敵側に渡した。

実に「プエブロ」号事件をめぐる朝米対決の11カ月間は、信念の対決、胆力の対決、知略の対決であった。

むすび

「プエブロ」号の拿捕事件が起きてから57年の歳月が流れた。

今、「プエブロ」号は祖国解放戦争勝利記念館の露天に展示されており、ここを訪れる参観者に米国のスパイ行為をことごとく暴露している。

米国は、「プエブロ」号が祖国解放戦争勝利記念館の露天博物館に移されるときまでそれを全く知らなかった。

去る30年間、米国の神経を刺激してきた「プエブロ」号は敵の軍事作戦水域を悠々と通過して、1998年に米国侵略船「シャーマン」号の撃沈碑のある大同江の閑似亭浅瀬の所に繋ぎ止められ、その後2013年には祖国解放戦争勝利60周年に際して祖国解放戦争勝利記念館の露天に展示された。

米国の降伏

執　筆：崔錦玉
編　集：柳順英
翻　訳：李鮮日
発　行：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発行日：2025年12月

ㄱ-250880373003

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp



朝鲜民主主義人民共和国
外国文出版社
2025年

ISBN 978-9946-0-2650-3